

ヘレニズム世界の紛争と共和政期ローマの進出

比 佐 篤

はじめに

ヘレニズム時代に入り、東地中海ではヘレニズム王国が影響力を強めていく。やがて元首政期には、ローマの支配が確立していった。つまり、東地中海の盟主の座はヘレニズム諸王国からローマへと移っていったと見なしうる¹。となれば、その中間にあたる共和政ローマの時代には、すでにローマが東地中海で中心的な勢力として君臨していたと考えるのが自然である。確かにローマは、前3世紀末より東地中海へ進出して次々と戦争に勝利していくし、対外戦争そのものに積極的だったとする見解が近年では強い²。けれども、ローマが東地中海への介入へ意欲的だったのかというと、決してそうとは言い切れない。これは、ローマの公職者たちが派遣された地域を見れば明らかである。ただし同時に、東地中海の人々はローマの介入をむしろ望んでいた様相も見取れる。順番に確認していきたい。

1. 東地中海への公職者の派遣状況

そもそも共和政期のローマでは、海外で軍隊を伴って活動できるのは、原則として命令権 imperium を持つ上級公職者、つまりコンスルとプラエトルのみに限定されていた。コンスルは共和政期を通じて毎年2人であり、プラエトルも前198年に6人に増員されたが、スラの時代までそれ以上は増えなかった。上級公職者は、就任後に元老院が定めたその年の管轄地を割り当てられた。したがって、その管轄地がどこであったのかは、ローマの対外政策の方向性を示していると言える³。管轄地は、リウィウスの史料より、第2次ポエニ戦争が始まった前218年から、第3次マケドニア戦争後の前166年ころまでは判明する。この期間のなかで、第2次マケドニア戦争が始まった前200年以後は、本格的に東地中海へと進出していった時期と見なされている。その後、公職者の選出後に管轄地を定めるという制度は、スラによって管轄地の改革がなされて、コンスルとプラエトルは1年間ローマで勤務した後に管轄地へ派遣される形式に変更された前82年まで変化しなかった。そこで、前218年から前201年まで、前200年から前166年まで、前165年から前82年までのそれぞれの時期における管轄地の

状況を、データによって確認したい。

まず、表1の前216年から前201年をみれば、コンスルの80パーセント弱がイタリアを管轄地としていることが分かる。これは、第2次ポエニ戦争時のハンニバルの侵入によって、イタリアが危機的な状況にあった事実を物語っている。同様の状況は表2からも確認でき、ローマに留まり続けるのが通例であった都市プラエトルと外国人プラエトルを含めて、プラエトルの60パーセント以上がイタリア半島に留まっている。

さらに注目すべきは、この時期にはシチリアとサルディニアを管轄地としたプラエトルが多いという事実である。シチリアとサルディニアは、イタリア外部における最初の管轄地であり、特にシチリアは、カルタゴ側に付く勢力もあったために重要な地域であった。しかし、ハンニバルの攻撃を受けていたイタリア半島に比べれば、重要性は低い。つまり当時は、最も重要な地域はコンスルに任せられ、それに準じる地域はプラエトルに割り当てられた、と推測できる。

それでは、東地中海へ進出したとされる前2世紀は、どのような状況であったのか。表1、2を見る限り、大きく変化したようには見えない。まず前200年から前166年まで、コンスルの75パーセントがイタリアに留まっている。第2次ポエニ戦争以後のローマは、盛んに東地中海で戦争をしているイメージが強いものの、コンスルの管轄地からはそうした事実は窺えない。同じ時期のプラエトルについては、イタリア半島内に留まっているプラエトルは40パーセント弱に減っている。だが、主たる派遣地域はむしろヒスパニアである。加えて、シチリアとサルディニアにも併せて30パーセント弱のプラエトルが派遣されている。以上のように、総体としてのローマは、東地中海での活動はさほど積極的ではなかった様相を見て取れる。

前166年以後に関しては、史料の不足からはっきりとは分からない。ただし、断片的な歴史的事実や概略を述べている現存する史料には、ギリシアを特に重視したとの情報が読みとれるものはない⁴。

そもそも当時のローマは、広がった勢力範囲を効果的に支配するべく組織を改革しようとはしていなかった。これは、ローマの管轄地の状況を眺めればはっきりと分かる。イタリアには基本的に1人が割り当てられるが、2人の場合も多い。そして、都市プラエトルと外国人専門プラエトルがローマに留まる。イタリア外部だと、まずシチリアとサルディニアである。そして、ヒスパニアにはプラエトルが1人か2人は派遣されるのが一般的である。この時点で、少なく見積もっても6人、多く見積もれば8人の上級公職者が必要となる。コンスルとプラエトルは併せて毎年8人ずつしか選ばれないのだから、この時点で規定の人数を使い切ってしまう。にもかかわらず、上述の通りプラエトルの増員は、スラによって実施されるまでなされなかった。しかも

表1 コンソルの管轄地（前218年～前82年）

	前218－201年	前200－166年	前165－82年	合 計
イタリア	33 (78.6%)	55 (75.3%)	45 (25.1%)	133 (45.2%)
ガ リ ア			9 (5.0%)	9 (3.1%)
シチリア	3 (7.1%)		4 (2.2%)	7 (2.4%)
サルディニア		1 (1.4%)	3 (1.7%)	4 (1.4%)
コルシカ			4 (2.2%)	4 (1.4%)
ヒスパニア	1 (2.4%)	1 (1.4%)	22 (12.3%)	24 (8.2%)
アフリカ	1 (2.4%)		8 (4.5%)	9 (3.1%)
海 軍	2 (4.8%)			2 (3.1%)
東地中海	1 (2.4%)	14 (19.2%)	17 (9.5%)	32 (10.9%)
不 明		2 (2.7%)	67 (37.4%)	70 (23.8%)
合 計	42	73	179	294

表2 プラエトルの管轄地（前218年～前82年）

	前218－201年	前200－166年	前165－82年	合 計
都 市	18 (22.2%)	33 (15.3%)	15 (3.0%)	66 (8.2%)
外国人専門	14 (17.3%)	33 (15.3%)	4 (0.8%)	51 (6.4%)
イタリア	20 (24.7%)	17 (7.9%)	11 (2.2%)	48 (6.0%)
ガ リ ア			2 (0.4%)	2 (0.2%)
シチリア	16 (19.8%)	31 (14.4%)	15 (3.0%)	62 (7.7%)
サルディニア	12 (14.8%)	29 (13.4%)	3 (0.6%)	44 (5.5%)
ヒスパニア		46 (21.3%)	21 (4.2%)	67 (8.4%)
アフリカ			4 (0.8%)	4 (0.5%)
海 軍	1 (1.2%)	9 (4.2%)		10 (1.2%)
東地中海		2 (0.9%)	23 (4.6%)	25 (3.1%)
不 明		16 (7.4%)	406 (80.6%)	422 (52.7%)
	81	216	504	801

拙著『「帝国」としての中期共和政ローマ』見洋書房、2006年より作成。コンソルは毎年2人ずつ、プラエトルは前198年までは毎年4人、それ以後は毎年6人ずつそれぞれ選ばれた（ただし、両者共に人員が補充される場合もあった）。東地中海にはイリュリア、ギリシア、マケドニア、アジア（小アジア）、シリアが含まれる。

その時点でも、6人から8人になったにすぎない⁵。

これを踏まえた上で、もう一度前166年までの状況を見直してみたい。確かにこの時期、ローマはマケドニアやシリアと戦争をしている。ただし戦勝後には、軍隊を撤退させている。ローマは戦争終了後に征服地を属州にした、としばしば言われる。確かに、属州と定められた地域は、派遣された公職者の命令権のもとにあったし、納税の義務があった点で、ローマに服属していたのは事実であろう。それでは毎年のように属州総督が派遣されていたのかというと、実はよく分からない。史料の不足から判断できないという点もある。しかしそれと同時に、上級公職者の人数の不足から、毎年派遣できなかったはずである。そのため、そういった地域には徴税請負人が税の取り立てを行ってはいるものの、それを管轄する上級公職者はいなかったことになる⁶。

上級公職者の人数が変わらない以上、以後もこうした方針は維持されたはずである。となれば、ギリシアは他の地域と同じく、軍事的な必要に応じて派遣される地域の1つであった、と見なす方が自然であろう。実際に、前2世紀後半から前1世紀はじめにかけて、マケドニアに派遣された上級公職者の役割は、そのほとんどが北方のトラキアに住む異民族との戦いであった。対照的に、行政的な役割を担ったという事例がほとんど確認できないのは⁷、史料に残されていない人物が派遣されていたと見るよりも、そもそも派遣されていなかったためと捉えるべきであろう。

2. ローマによる東地中海での活動の実態

それでは、東地中海の諸勢力はどのように対応したのであろうか。結論から言ってしまうと、東地中海の諸勢力は、むしろローマの介入をしばしば望んでいた。それを示すものとしてT. クィンクティウス=フラミニヌスの貨幣がある。フラミニヌスは、第2次マケドニア戦争を最終的なローマの勝利に導いた人物として知られている。このフラミニヌスはマケドニアに勝利した後に、ギリシア人の前でギリシアの自由を宣言している。おそらくこの貨幣は、そのときにフラミニヌスを讃えて作製されたものと考えられている⁸。

やがてローマは結局のところギリシアを勢力下に収めていくので、このギリシアの自由宣言は単なる言葉だけのものにすぎないのかと言えば、そうとは言い切れない。なぜならば、ギリシアの自由宣言はヘレニズム王家によってしばしば使われてきたスローガンだったからである。ヘレニズムの諸王家は、一定の地域やどこかの都市の独立を認める際に、彼らの自由を宣言することでそれを承認していた。いわばより強い立場にあるものが、より小さい勢力の自由を保護するという構図であった⁹。ギリシ

ア人がフラミニヌスの肖像が描かれた貨幣を鑄造したのは、フラミニヌスに、ひいてはローマにそうした役割を期待していたのであろう。

ここで注意すべきは、ローマが東地中海でも強大な勢力になったとしても、東地中海の諸都市や同盟などが、独自の外交の実施を止めたわけではない点である。たとえば、前2世紀後半になっても、ギリシア諸都市間で条約を結んだ例を確認できるし、お互いの同盟関係を更新する行為もしばしば行われている¹⁰。ローマの勢力拡大は、東地中海世界の政治や外交そのものを排除したわけではないと言えよう。むしろだからこそ、東地中海の人々は、政治や外交を行うなかで、ローマにヘレニズム諸王たちと同じ役割を期待していたと思われる。

たとえば、東地中海の人々がローマ人に求めた役割の一例として、仲裁が挙げられる。敵対的な関係から友好関係に戻ろうとした場合、ギリシアでは両者の間に仲裁者を置くことが一般的であった。前3世紀になると、そうした仲裁者にマケドニアをはじめとして、シリアやプトレマイオスなどのヘレニズム王国の国王が選ばれるようになった¹¹。ギリシアへ進出してきたローマは、ヘレニズム王家に匹敵する巨大な勢力である。となれば、ギリシア人がローマ人に仲裁者としての役割を望んだとしても不思議ではない。ただし、当初ローマ人は、こうした仲裁の制度をあまり理解していなかった。それを物語るのが第2次マケドニア戦争でのエピソードである。

前198年に、マケドニア国王フィリッポス5世とローマのコンスルだったT. クィンクティウス=フラミニヌスは、会談を行っている。まず、フラミニヌスはマケドニアにギリシアからの撤退を要求した。これに対してフィリッポス5世は、仲裁者を立てて、マケドニアとローマの双方がどれほどの損害を被っているか調べよう、と申し出た。いわばそれまでのギリシアのやり方に従ったわけである。ところがフラミニヌスはそもそも侵攻してきたのはフィリッポス5世の方であり、間違っているのはマケドニアなのだから、仲裁をしてもらう必要などない、と答えたという¹²。

ただしこの後のローマは、ギリシアのやり方を知り、その一部を取り入れようとしている。というのは、シリアとの戦争に勝利したローマは、もしシリア王国がどこかの都市ともめた場合には、仲裁者を招いて事態の解決に当たるようにとの条文を、条約に書き入れているからである。だがやはり、ローマは積極的に仲裁者の役割を果たしたとは考えにくい。なぜならば、ローマが仲裁者の役割を引き受けようとはしない事例も目立つからである。むしろ、ギリシア人の仲裁者を選んでそちらに任せるか、それどころか当事者同士に任せてしまう場合さえあった¹³。

仲裁以上の軍事的な援助に対しても決して積極的ではない。ギリシア人から軍事的な援助の依頼がきた場合も、仲裁を行って出来る限り和平に持ち込もうとしている。

そうした仲裁のために派遣されたのが、外交使節 *legatus* であった。確かにローマは、東地中海に外交使節を盛んに派遣している¹⁴。それではローマが、戦争ではなく外交によって東地中海で勢力を伸ばしていこうとしていたのかというと、そうとは言えない。もし本当にそうであるならば、上級公職者をもっと派遣していたはずである。逆に当時の状況から判断すれば、むしろ東地中海の人々が、ローマという強大な勢力の介入を求めているのであって、ローマはそれに応じて使者を派遣しているにすぎないと言える。

ただし、ここで留意すべき点がある。それは、派遣された使者個人の行動である。そもそもローマ人は、上級公職者を派遣しない地域への外交使節の派遣を、共和政の成立期からしばしば行ってきた。注目すべきなのは、外交使節が派遣先においてある程度の主導権を握っていたと考えられる事実である。

たとえば、前168年に東方へと派遣された C. ポピリウス=ラエナスのエピソードを見てみたい。当時、セレウコス朝シリアがプトレマイオス朝エジプトへと進軍していた。このときエジプトはローマに使者を送り、援助を求めている。その結果として派遣されたのがラエナスであった。いわばローマは、東地中海世界で一般的に行われていた仲裁の役割を、エジプトからの求めに応じてこのときは果たそうとしたと言える。ラエナスは元老院から、エジプトへ侵攻していたシリアを撤退させるようにとの指令を受けていた。ラエナスを迎えたシリア王は、この件について友人へ相談する、と答えた。するとラエナスは王の周りに円を描いて、ここから足を踏み出す前に撤退するか否かを決断するように迫り、王から撤退の約束を得たとされる¹⁵。ここで興味深いのは、ラエナスが王の態度に怒ってこのような行いに出たとされている点である。確かに、シリアを撤退させることが、元老院によって与えられた任務であったが、そのためにとった手段は、明らかにラエナスの個人的な考えのもとに行われている。

これとほぼ同じ時期である前163年に、東地中海へと派遣された Cn. オクタウィウスの事例は、さらに示唆的であろう。彼はシリアへ着くと、シリアの船を燃やし、ゾウの略奪などを行った。その結果として彼は現地人に殺害されてしまう。その後、シリアからローマへと使者が派遣されたものの、ローマ人はこの件に関してシリアへ何らの報復も行わなかった¹⁶。つまりローマは、外交使節の行いに対して、ある程度の指示を出す以外はあまり関心を抱いていなかったことになる。逆に言えば、だからこそ外交使節たちは自らの裁量に基づいて自由な活動を行い得たと考えられる。

ここでもう1つ触れておくべき点がある。それは外交使節の意味を持つ *legatus* は、ローマの軍団において補佐的な役職として任命される場合もあった点である。特にこうした軍団の補佐としてのレガトゥスは、前2世紀に入るとごく一般的になる¹⁷。そ

の一方で、いわゆる外交的な使節として派遣されたレガトゥスも、軍隊を率いて独自の軍事活動をするということは、すでに前5世紀から見られる¹⁸。

こうした事例は、第1次ミトリダテス戦争中にも見られる。前89年にビテュニアへと派遣されたM^o. アクィリウスとマリウス＝マルティヌスは、軍隊を進めたミトリダテスに撤退を求めべく、東方へ使節として赴いた。しかし、後にアジアで軍備を整えたとされている¹⁹。つまり、独自の活動をしていた使節が、さらに軍事活動さえ行う場合もあったわけである。いわば、ローマの東地中海の外交は、ローマの外交を正式に担っていた上級公職者以外の人物の影響力が大きくなっていったと言える。

このレガトゥスは、さらに重要な意味を持つ。前67年に、ポンペイウスは、地中海を荒らしていた海賊を征伐するために、地中海全域とその沿岸での軍隊指揮権が認められた。当然ながら、彼がひとりだけですべての領域での指揮を担うのは不可能である。そのため、補佐役として15名のレガトゥスを任命して、各地での活動を彼らに任せた²⁰。後に元首政期に入ると、レガトゥスは元老院管轄属州副官 *legatus proconsulis*、皇帝管轄属州長官 *legatus Augusti pro praetore provincia*、軍団司令官 *legatus legionis* などへ名前を変えて、正式な公職へと組み込まれていくことになる²¹。となれば、ローマ人による東地中海での外交方針、すなわち積極的には関与せずに、その場の状況において個別に対応を任せるという指針が、後のローマ帝国の制度の土台になったと考えられるのである。

おわりに

ここまでの内容をまとめてみたい。ローマは前2世紀の段階では、ギリシアでの支配権を確立しようという意志をあまり持っていなかった。一方で、ギリシアの側はローマを引き込もうとし続けた。それは、諸王国との結びつきを強めようとしたヘレニズム時代からの慣習の延長線上にある。だが、それでもローマはさほど積極的ではなかった。ただし、東方からの求めに応じて派遣される使者は独自の活動を行う場合もあった。つまり、個人的な活動こそがローマによる東地中海の活動を支えていたことになる。こうして、ローマ帝国は東地中海で戦争に勝利しながらも、だからといって支配したわけではなく、なおかつ東地中海で活動する者たちもいる、という状況を生む結果になる。

これはローマ帝国の本質でもあると思われる。しばしば指摘されているが、ローマ帝国は、その大きさに比べて公職者の少ない「小さな政府」であった。元首政期になり少しずつ統治組織は整えられていくものの、そもそもそうした組織がなくてもローマの勢力が地中海で維持されていたのは、少数の個人による活動がローマの勢力を維

持していた、共和政期の慣習が色濃く残っていたためではなかろうか。ヘレニズム時代の慣習をローマ帝国の制度として利用していくための準備期間が、共和政期だったのかもしれない。

〈註〉

- 1 両時期の状況については、波部報告と桑山報告を参照のこと。なお、前2世紀から後2世紀までのギリシアの状況については、S. E. Alcock, *Graecia Capta: the Landscapes of Roman Greece*, Cambridge, 1993, pp. 8-24が簡便にまとめている。
- 2 その代表として、W. V. Harris, *War and Imperialism in Republican Rome 327-70 B.C.*, Oxford, 1979が挙げられる。研究史は以下を参照。R. M. Errington, “Neue Forschungen zu den Ursachen der römischen Expansion im 3. und 2. Jahrhundert v.Chr.”, *HZ*, 250, 1990, S. 93-106; E. Frézouls, “Sur l’historiographie de l’imperialisme romain”, *Ktema*, 8, 1983, pp. 141-62.
- 3 以下の管轄地をめぐる論に関しては、拙著『「帝国」としての中期共和政ローマ』晃洋書房、2006年、第1・2章に基づいている。
- 4 同上、134-36頁。
- 5 Cf. T. C. Brennan, *The Praetorship in the Roman Republic*, vol. 1, Oxford, 2000, pp.388-403; W. Kunkel, R. Wittmann, *Die Magistratur*, München, 1995, S. 708.
- 6 管轄地ごとの上級公職者の派遣情報は、W. F. Jashemski, *The Origins and History of the Proconsular and the Proprætorian Imperium to 27 B.C.*, Chicago, 1950を参照のこと。
- 7 Cf. R. M. Kallet-Marx, *Hegemony to Empire: the Development of the Roman Imperium in the East from 148 to 62 B.C.*, California, 1995, pp. 125-60.
- 8 M. H. Crawford, *Roman Republican Coinage*, vol. 1, Cambridge, 1974, p. 544 (no.548). なお、ローマにて実在の人物を描いた貨幣が現れるのは前1世紀に入ってからであり(拙稿「貨幣の図像と共和政ローマの政界」『立命館史学』第31号、2010年、1-21頁)、個人崇拝に近いものは、ローマよりもむしろギリシアで始まったことになる。
- 9 E. S. Gruen, *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, Berkley, 1984, pp. 134-42.
- 10 Cf. W. Dahlheim, *Gewalt und Herrschaft: das provinzielle Herrschaftssystem der römischen Republik*, Berlin/New York, 1977, S. 199; Gruen, *op.cit.*, pp. 46-51 and p. 93f.
- 11 Cf. A. J. Marshall, “The Survival and Development of International Jurisdiction in the Greek World under Roman Rule”, *ANRW*, II.13, 1980, pp. 626-61.
- 12 Liv., xxxii.10.3-6; cf. Gruen. *op.cit.*, p. 102f.
- 13 Cf. Gruen. *op.cit.*, pp. 105-10; Kallet-Marx, *op.cit.*, pp. 161-83.
- 14 Cf. T. R. S. Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic*, vol. 1, New York, 1951.
- 15 Pol., xxix.27.1-10; Liv., xlv.12.3-12.8; Val.Max., vi.4.3.
- 16 App., *Syr.*, 46-47; Pol., xxxi.11.1-2.

- 17 Kunkel, Wittmann, a.a.O. S. 370-75; B. Schleussner, *Die Legaten der römischen Republik: Decem legati und ständige Hilfsgesandt*, München, 1978; B. E. Thomasson, *Legatus: Beiträge zur römischen Verwaltungsgeschichte*, Stockholm, 1991.
- 18 前492年: Dio.Hal., v.26.4. 前391年: Liv., v.35.4-36.10; Dio, fr.25; Diod., xiv.113.4-8; Dio.Hal., xiii.12; Zon., vii.23.
- 19 App., *Mith.*, 11-17; Iustin., xxxviii.3.4-9, 4.4-5.
- 20 Cf. A. E. R. Boak, “Extraordinary Commands from 80 to 40 B.C.”, *AHR*, 14, 1918, pp. 1-25; Kunkel, Wittmann, a.a.O. S. 376; E. Meyer, *Caesars Monarchie und das Principat Pompejus*, 3. auf., Berlin, 1922. なお、レガトゥスという職名が、外交使節と軍団補佐のどちらの役割にも与えられていた意味については、別稿を準備中である。
- 21 Von Premerstein, “Legatus”, *RE*, XIII, 1924, Sp. 1144-49; E. マイヤー（鈴木一州訳）『ローマ人の国家と国家思想』、岩波書店、1978年、313-14頁。